

無双直伝英信流正統第二十代宗家 河野稔天劍百錬先生

伝承会報

第一号 平成十九年四月一日発行

編集発行 鈴木伸昌

はじめに

この会報は、無双直伝英信流正統第二十代宗家 河野稔天劍百錬先生の研究を目的とした会報であります。

決して河野百錬「教」という宗教にならず、「先人を求めず、先人の求めたところを求める」ため、河野先生の求められた居合の真髄を求めるよすがとして、河野先生を研究検証して参りたく思っております。

大阪に萩野保正先生という方が居られました。河野先生の最後の弟子といってもいい方で、入門初心者に宗家手ずからお教えになるということは通常は考えられないことであつたが、入門当時四十歳を超えられていたためか正座の部は河野先生自らご教授されたという。その後河野先生の高弟である中垣先生につかれた。英語の教師でもあつた萩野先生は中垣先生のお子様の家庭教師もなされたという。

私は平成十五年七月十二日、大阪堺市の七道にある堺市立青少年センターの日本居合道連盟の道場を訪ねた。その日は見学をされておら

れた萩野先生は連盟としては門外漢の私にも親しくお声掛けくださいされ、私が河野先生を慕っていると知るや、河野先生についてお話くださいされ、後日「百錬会報」というものを送ってくださいました。萩野先生は「河野先生のことを少しでも知っている者は、その人間や業績について語る責任を持たねばならない。」という使命感から、自身で発行された会報であつた。それまでも、日本居合道連盟の機関紙「侍」や、ご自身の自主出版の本で河野先生についていくつもの文を発表されておられたが、河野先生についてのみの会報を発行するにいたつたのである。残念ながら三号まで発行したのち、病に倒れられ、ご逝去された。この事に私は少なからず衝撃を受けた。これから「百錬会報」で河野先生のことを色々と知ることができると思っていたからである。

河野先生が鬼籍に入られてより既に三十三年が経過いたし、その警咳に接する榮に浴された多くの先達もまた年々幽明境を異にしている現在の現在が、伝承のぎりぎりの時ではないかと、いささか危機感を覚えたのはこの時であります。

私は河野先生生前には間に合っておりませんが、萩野先生のお志を万分の一でも継ぐべく、河野先生生前に間に合われた先達に伺つた話などを綴っていきたく、この会報の発行を決意いたしました。

ですからもちろんその目的達成のためには、あらゆる方からの河野先生に関するお話は大歓迎であります。投稿自由といたします。文章はともかく話ならしいという方、ご一報いただきたく存じます。

既に発表されている先達の文章についても掲載し、河野先生に関するクロニクルを目指してまいりますので、諸先生方のご指導ご鞭撻を仰ぎたくお願いいたし発行の言葉とさせていただきます。

平成十九年四月吉日

鈴木伸昌 拝

百錬用箋に刻印された言葉

百錬用箋とは、河野先生がご自身用に印刷された便箋であり、その右端下部に「百錬用箋」と印刷されている。またその左端には次の言葉が印刷されている。

「貴美河須武耶 鈍巨寸衣於由久由久刀 香久留流真伝茂加惠利美志波耶 菅丞相」(印は判読不能文字)

この文言について、浜澤夫先生(河野先生生前、英信流指導会東海支部長)に質問したところ、

「菅丞相とは菅原道真のことであり、これは延喜元年の菅原道真作の歌。「君が住む宿の梢のゆくゆくとかくるまでも帰りみちはや」と読む。印の文字は万葉仮名を調べなさい。」

とご教示を賜った。

万葉仮名の調査は現在進行中だが、まずこの歌について調べてみた。次のような解説を見つけたので紹介したい。

「この歌の「君」が宇多法皇という見方もあるが、『拾遺和歌集』のもとになった『拾遺抄』の詞書には「流され侍て後、妻のもとに言ひをこせて侍ける」と相手を明記している。具体的に誰を指すかは不明だが、正室であり、幼少時から道真が師事していた島田忠臣の娘である島田宣来子というのが通説。

漢詩と和歌の性格の違いなのか、道真の漢詩には恋愛関係の話が出てこない。妻を指すにも息子の母親という迂回した表現をとることがあるほどで、漢詩はそもそも異性への愛を語るものではなかった。その意味で、この歌は道真が妻に贈ったという珍しいもののだが、「見えなくなるまであなたの家を眺めていました」(これは「貴方のことを

ずっと考えていました」という意味でもあります。)と名残惜しさを告白されると女性は感極まるのです。

意識 流されて後、言い寄こした歌 贈太政大臣

あなたが住む家の木の梢が遠ざかるにつれ 隠れて見えなくなるまで振り返って見たことよ

河野文字様(河野先生ご令室)は、河野先生より「我が家を尋ねてくれた方がお帰りになるときに、その方の姿が見えなくなるまでお見送りするものだ。今日お会いしても明日はどうなるかわからんのかから。」と教えられたそうです。

この歌を、ご自身の便箋に印刷された河野先生のお気持ちは、「貴方のことをずっと考えています」ということではなかったか。

「人間・河野百錬」を考えるとときには欠かせない逸話に思える。

最後の注文刀の中心に刻まれた言葉

河野先生の最後の注文刀となった太刀の佩き表の銘は

伯耆國小林吉永作 大和劍 昭和・寿久年仲春

そして、佩き裏の銘は次のようなものであった。

無双直伝英信流正統第廿代宗家 名人位 河野稔百錬所持

和河多摩波加美乃多摩那利此多洲良仁 加美乃真仁真仁伊摩

於移伎奴久

これは、「わがたまはかみのたまなり、ひたすらに、かみのまにまに、今を生きぬく」と読むのだが、同じ言葉を、浜澤先生が河野先生の正座をするお姿を写真に撮られパネルにするときに、河野先生はこの歌を揮毫し、このように続けられた。「居合大神之加護に依る九死に生を

得た正月 於 大阪市大病院 之作」

この九死に生を得たというのは、河野先生が昭和三十九年頃、腸捻転で一時危篤に陥られたときのことである。奇跡的に腸が動き出して生還されたのだが、そのとき作られたのがこの歌である。

生還を神様のご加護によるものとして、ひたすら感謝の念をあらわし、その神様のご意思で生を得た以上、今を大切に生き抜くというよきな意味と解せられる。

河野先生は、いつも「目に見えぬものの力」について語られたという。それは、あるときは抜きつけのときの左手の大切さを語るべきであり、あるときは、神様に対する畏怖の表れとして語られたという。その河野先生が自分と神様とを同一視するとは思われない。

後年、そういう経緯を知らずにこの歌だけを読んだ者が、浅学極まりない解釈、たとえば「わがたまは神のたまなり」を「自分の魂を神の魂」と曲解し、「己を神と同一視するとは不遜である」などといわれるのを小生は恐れるのである。

この私の危惧、これは杞憂にすぎないであろうか。否。

現に、河野先生が二十代を継がれたことに対する妬み嫉みも一因であろうが、河野先生が「二十代を欲しがった」などと公言するものが居るのである。

また、一方、さる高名な剣道家が発表を念頭におかず書き溜めた文章の中に河野先生を揶揄するものがあり、それがその先生が亡くなられた後に本として発表された。その企画に、ことさら河野先生を貶める意図を感じざるをえないのである。

また、インターネット上では、何も知らない世代が、自分の師から聞いた居合いの歴史を検証もせず載せているのである。

(今後そういうことについても検証を重ねて参ります。)

さて、この「神のまにまに今を生き抜く」という箇所に思い出されることがある。長谷川俊明先生(河野先生直門の高弟)に伺った話である。

河野先生はお酒を愛されたという。稽古帰りに一杯やっているときに、河野先生の健康を気遣われた長谷川先生が「先生お一人のお体ではございませんので、お大事にお願いします。」とお話されたときに、河野先生はこのように答えられたという。

「わたしはそんなことはせん。世の中が、また目に見えないものが私を必要とするならば生かしてくれる。それを呑みたい酒を三杯を一杯に、五杯を三杯にするなんてことは出来ない。そんな事をしてこの世を終わって何になるか。それより「今」を大事に行きたい。「今」はもう二度と来ない。したいことはして。」

目に見えないものの力とは神様のことなのであろう。生死をさまよう大病から生還されたから、「今」を大事に思われるようになったのであろうか。そのことで思いが強くなったことはあったとしても、河野先生にとってこの哲学は、以前からではないかという気もする。

二十九歳で居合を志し、四年後には大日本居合道八重垣会を創設、講習会方式で始めた修行であり、不明の点は手紙で師に教えを請うなどしたとはいえ、わずか六年で「無双直伝英信流居合術全」を、十一年で「無双直伝英信流居合道」を、十六年で当時としては画期的であった写真入りの「大日本居合道図譜」を著された河野先生の居合歴は、天賦の才があつたにしてもあまりにも凄すぎる

この偉業をなしたのには、やはり「今を大事に」稽古、研究を積み重ねたからではなかったかと、私には思えてならない。

さて、続いて、この注文刀について、河野先生の刀の嗜好を現わす逸話として紹介したい。

仲介した浜澤先生の解説は次の通りである。

「宗家が注文された由来。私の居合刀をご覧になった時、誰の作品かと問われ、鳥取の小林刀匠と申し上げた。私の好みで柁目鍛え直刃調をお願い致しましたと答える。宗家お聞きになり、私も注文したいがと話が進み宗家より注文依頼書が到着、直ぐに小林刀匠に送った次第。」

この刀は太刀で、長さ七九・五センチメートル、反り二・三センチメートル。目釘穴一個。中心には昭和・寿久年仲春とある。ところが、登録証の日付は昭和四十九年拾貳月拾日である。

河野先生は昭和四十九年三月二日に倒れられ、五月二十一日にお亡くなりになられている。

仲春とは春半ばの一ヶ月、陰暦では二月。河野先生はいつ浜澤先生と会われて鍛刀を頼まれたのか、河野先生は完成したこの刀を見ることは出来たのだろうか。中心の日付は、刀が出来た日なのだろうか、とすると、河野先生はこの刀を見ることが出来たことになるが、登録証の交付日がそれと違うのは何故なのだろうか。

再び浜澤先生にご登場いただく。

「この時、小林刀匠側では自衛隊居合道部よりの受注と私たちとの六振りと重なっており、月に二本しか新作刀の登録が出来ず、登録証の日付は後日となるのが受注の条件でした。現に私の刀も昭和四十九年七月二十九日の発行です。宗家の刀は昭和四十九年二月頃荒研ぎと八バキの組み合わせで大阪に送ったのです。直に宗家から代金が送金されてきました。この注文刀が何の目的かお聞きしておりません。」

造りからして太刀銘を望まれたものです。河野先生所持の戦前の高橋貞次二振りも太刀、居合にご使用の肥前国陸奥守忠吉も太刀銘、ご愛蔵の土佐は左行秀も太刀銘です。」

河野先生は生涯最後の注文刀を目にしておられたことになる。ここでもう一つ、疑問がある。河野百錬の錬の字が、誤って「練」と彫られているのである。

このことに関して、もう一度浜澤先生にご登場願おう。

「百錬の練に関しては、刀匠のあやまりかどうかは解りません。親交のあった海老根達先生は、

『百錬』の号は藤田東湖の『正気の歌』の詩『天地正大の気が凝つては百錬の鉄（日本刀）となり鋭利兜を断つべし』から採られています。日本精神即ち武士道を志向し日本刀を愛し、自らの兵法を百錬の鉄としようとした先生の決意が察せられます。」

当時の宗家の胸中は複雑であったと察します。私の憶測であります。仮に刀匠のあやまりにせよ、この機に諸々の問題を一気に練り直す決意で、来る九州日田に於ける行事（喜寿のお祝い）にお話される積もりであったかもしれません。この刀匠の「練」が偶然で有ったかどうかは謎です。

刀匠の間違いであつても、宗家のお人柄から申して多分・・・よく仲居さんの落度で廻りの人たちが声を荒げた態度をされても宗家は、いいからいいからと、あの笑顔で制止された場面は何とも言えないすがしさを思い出します。」

このことであつた。

「練」の字の謎はついに解けることはなかったが、河野先生の器の大きさだけは確認できたのではないか、と思う。